小笠原長清公祠堂

―おがさわらながきよこうしどう―

ふるさとの誇り 175

博レポート

戦後すぐとみられる小笠原・山寺周辺の写真。画面左手に見える林が山寺八幡神社。その手前に修理作業中とみられる小笠原長清公祠堂が見える（小笠原町町制十五周年記念写真帳より）。

明治期とされる写真。整備直後だろうか。上記の写真にはない玉垣などがみられる（三沢一也氏所蔵）。

※駐車場はありません

現在もご近所や地元町内会の皆さま、小笠原長清公顕彰会などによって清掃活動が行われています。

小笠原家の始祖の墓ということを示す、長育による「小笠原家高祖之塋域」の文字が刻まれ、裏面にはこの建設に尽力された方の名前が刻まれています。

小笠原氏の始祖　小笠原長清

長清は、甲斐源氏の一流、加賀美遠光の次男として応保二（一一六二）年に生まれ、原小笠原荘（南アルプス市小笠原）を拠点とし、小笠原長清と称しました。「御所庭」や「的場」という地名の残る小笠原小学校付近に館を構えたと考えられています。

長清は父遠光とともに鎌倉幕府の創建に活躍し、源頼朝の絶大な信頼を得ます。長清は弓馬の術に優れており、「弓馬の四天王」に数えられたとされ、長清以降、弓馬術の伝統は代々小笠原氏に受け継がれていくこととなります。

承久の乱では、武田信光とともに東山道大将軍として活躍し、鎌倉幕府の軍勢を率いて上洛した後、長清は京都に生活の基盤を築きます。

仁治三（一二四二）年に亡くなり、京都の清水坂に自ら建てた「長清寺」に葬られたと言われます。応仁の乱によりこのお寺が焼失したため（応仁期の地図には、長清寺が描かれています）、小笠原氏の子孫等により、岐阜県の荘福寺、長野県の開善寺と長清寺の三か所に分骨されたとされます。

古墓の伝承

また、これとは別に、南アルプス市下宮地の一角、山寺八幡神社の北東に家臣らが遺骨を迎えて埋葬したという言い伝えがありました。「甲斐国志」には「古墓一基下宮地村ノ域内山寺村ノ産神祠ノ前二アリ里人小笠原殿ノ墓ト伝」とあります。

明治二四、二五年頃、村人たちがこのあたりを開墾した際に、土中から石棺が出土したことから、やはり長清の塚だったと考え、地域の名士であり、甲州財閥の代表格として著名な若尾逸平を通じて、若尾家と親族関係であった、小笠原家の子孫の東宮侍従（※）・小笠原長育へと連絡をとっています。その際に小笠原氏の始祖の墓所を大切にしてほしい旨返答があり、明治三四年、近村だけでなく、甲府、水戸等の有志らによる賛助も得て、山寺にあった若宮神社の社殿を移築して「小笠原長清公祠堂」が建てられました。長育からは小笠原家ゆかりの甲冑と刀が寄贈されています（刀のみ現存し、市へ寄贈されています）。

天皇中心の世の中となった明治期にあって、承久の乱で朝廷に対して活躍した長清への風当たりが強く、この祠堂ならびに石碑の存続に反発もあったそうです。そのような中でも住民有志らによって後世へと守り伝えられてきたのです。

祠堂の付近に、かつて、長清にもゆかりがあるとされる「西御幸祭」の神輿が立ち寄った「めぐり木」と呼ばれるエノキの大木があったため（「巡り木跡」の碑があります）、祠堂の裏手にもエノキの木が植えられたそうです。

地域の歴史を後世へ伝えようと取り組まれた場所であり、平成一四年に建物は修復されています。先日もどんど焼きが行われるなど、二〇年経った現在も地域住民が集う場となっています。

写真・文　文化財課

（※）東宮侍従＝皇太子の側近職